

国際比較調査(2)

「都市環境の中の子どもたち」

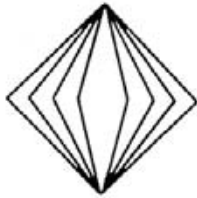
—東京・バンコク・オークランド・ロサンゼルス—

目次

本報告書の要約	4
はじめに	12
1. 調査対象都市のプロフィール	13
2. 家族と学校	16
● 家族をめぐって	16
● 学校配置	18
3. 生活リズム	19
● 起床から就寝まで	19
● 朝食と夕食	20
● 空腹感をめぐって	22
● 誰と寝ているか	23
4. 放課後の過ごし方	24
● テレビとのつきあい	24
● 家事の手伝い	26
5. しあわせ感をめぐって	28
● 一日の楽しさ	28
● しあわせですか	31
● 自己評価	33
● 成長欲求	34
6. 勉強への構え	36
● 学校へ行きたくない	36
● 教科の勉強は好きか	38

● 家庭学習の長さ	40
● 習いごと	42
● 勉強機の有無	43
7. 進学志望	45
● 成績の自己評価	45
● 大学進学志望率	47
● 進学率と成績	48
8. 将来の生き方	50
● つきたい仕事	50
● つきたい仕事と成績	52
● 将来の生活	54
9. 性差をめぐる	58
● 女子の生き方	58
● 主婦志向と成績	61
● 手伝いと性差	63
● 自己評価と性差	64
10. フィールド・ノートから	67
● バンコク	67
● オークランド	72
● ロサンゼルス	78
資料1 調査票見本	84
資料2 国別集計表	111

*おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。



本報告書の要約

調査レポート

国際比較調査(2)

「都市環境の中の子どもたち」

—東京・バンコク・オークランド・ロサンゼルス—

放送大学客員教授 深谷昌志
(6～10章)
東京学芸大学教授 深谷和子
(1～5章)

*調査協力者(敬称略)

バンコク

Chantana Chanbanchong
(タイ文部省)

Narons Sukpayak
(ロブリーの教育課)

塩沢 たか子 (バンコク在住)

オークランド

Robert A. Garden
(ニュージーランド文部省)

Anne Maguire
(国際教育ディレクター)

沢田 健二
(東京都国民国際交流協会)

ロサンゼルス

Dr. Dan Kelly (小学校校長)

*調査にあたってこの他、たくさんの方々の協力を得た。本報告書をまとめることができたのは、そうした無数の方々の励ましと援助のお陰である。厚く御礼を述べたい。

1. 調査の目的

すでに行われた1987年から88年にかけての第1回の国際比較調査「産業化社会の子どもたち」に次いで、今回は2回目の国際比較調査である。使用した調査票は前回のものに多少の内容的修正を加え、また言語的には新たにバンコク版、ニュージーランド版を作成した。都市環境に住む子どもたちが、毎日の生活の中でどのような幸福感の中に暮らし、自分たちの未来像をどのようなものとして描いているかが、調査のメインテーマである。

2. サンプル

対象は小学5年生で、東京、札幌、福岡の子ども1,282人、トーランス、ガーディナ(ロサンゼルス郊外)の子ども376人、オークランド、ウェリントン(ニュージーランド)の子ども1,046人、バンコク、ロブリー(タイ)の子ども864人、計3,568人。調査時期は1989年10月から1990年4月であった(表1・表2)。なお本レポートでは、これらのデータを4地域にまとめ、それぞれ東京、ロス、オークランド、バンコクと呼称してゆくことにする。

3. 生活リズム

調査日前日の過ごし方をたずねた結果では、起床から朝食までの時間はどの地域も約30分とあわただしく、とくにロスは9分と短い。また起床から登校までは約1時間だが、オークランドでは75分とややゆっくりしたテンポで朝を過ごしている。

夕食を食べてから就寝までの時間は約2時間半。その中では東京の子が3時間1分と長い。また睡眠時間はオークランドが10時間20分と長い。東京の子は9時間しか寝ていない。なお、前回調査のソウルは8時間44分、タイペイは8時間37分であった。(表5)

4. 朝食について

調査日の前日、朝食を食べなかった子は、ロスの11%を筆頭に、オークランド8%、バンコク4%、東京はもっとも少なくてわずか2%であった。また朝食を自宅ですべて食べた子の割合は東京が97%と最高で、オークランド90%、バンコク84%、ロス81%。朝食抜きの子や朝から学校給食を利用したり、屋台等で食事する子の数値は、家庭の安定度の指標とも考えられ、その点では日本の家庭の健康性を指摘できそうである。

また朝食を自宅で食べた子の中で、1人で食事した子の割合(孤食率)は、オークランド、バンコク、ロスが30%台だが、日本は19%と低い。(表6)

5. 夕食について

朝食と比べて夕食の孤食率はずっと低く、どの地域も10%を割っている。しかし食卓に家族全員がそろうかどうかを見ると、他地域が7割前後なのに、東京は42%と低く、しかも父親が不在の食卓が39%もあり、日本の父親が家庭生活から疎外されている様子が表れている。(表7)

6. 空腹感

子どもが朝食時に空腹かどうか、また昼食にせよ夕食にせよ、食欲があるかどうかは、単に生理的な条件からのもの、というよりも、その背景に子どもの健康な生活があるかどうか、よい生活リズムが保たれているかどうかを示している。ロスとオークランドの子は健康な食欲をもっているが、バンコクと東京の子どもは朝食も下校時も、それほどの食欲を示さない。第1回目の調査では、受験勉強が日本以上にきついソウルの子どもが際立って低かったことを考えると、考えさせられる結果である。(表8)

7. テレビ視聴

テレビの所有台数はどの地域でも2台以上が多く、いまや一家に複数のテレビが置かれている状況が一般化した(表10)。またテレビ視聴時間はロスと東京がほぼ3時間と他より若干長い。だが長時間視聴児もほとんどテレビを見ない子もいる、というように分散が大きいのに、日本は一樣に長目の視聴をしている点が特徴的である。(表11)

8. 家の手伝い

毎日家の手伝いをする子はバンコクに多く日本の子は4地域でもっとも手伝わない。また他の3地域では男子より女子が多く手伝っているが、オークランドは手伝いに性差が見られない。(表12・表13)

9. 一日の楽しさ

一日の中で15の時間帯をとってみると、4地域の子どもが共通に「楽しい」と言っているのは「放課後友達と遊ぶとき」「学校での昼休み」「夕食後テレビを見ているとき」で、それに次ぐ楽しい時間は「体育の時間」のようである。またもっとも楽しくないのは「宿題をしているとき」「朝食のとき」「朝目ざめたとき」である。(表14)

10. 楽しさ感

各時間帯の楽しさを地域間で比較してみると、もっとも楽しさ感の強いのはオークランド、次いでロス、東京、バンコクの順となる。(表15)

11. あなたはしあわせですか

「あなたはしあわせですか」とストレートに子どもたちに聞いてみると、どの地域も7～8割の子どもが「とても・かなり」しあわせと答えており、子どもたちのよき環境適応が見いだされる。しかし表14で見た楽しさ感と対比させてみると、オークランドの子はしあわせ感も楽しさ感も最大である。(表16)

12. 自己評価

子どもに「勉強のできる子ですか」「人気のある子ですか」等の自己評価を求めると、日本の子どもの自己評価は極めて低い。これは文化的文脈(けんそん、控え目など)で解釈するよりも、自信を失っている状態ととらえたほうが適切ではないだろうか。(表18)

13. 成長欲求

「早くおとなになりたいか」「いつまでも子どものままでいたいか」「小さい子どもの頃に戻りたいか」をたずねると、ロス、オークランド、前回調査のシアトルでは「子どものままでいたい」、ソウルでは「子どもの頃に戻りたい」、タイペイでは「早くおとなになりたい」と子どもたちは答えている。日本では、「早くおとなに」37%、「子どものままで」38%、「小さい頃に戻りたい」25%となっている。(表19)

14. 地域と幸福感

1) 4地域の中でもっとも幸福感が高く、客観的にも子どもらしい生活があるように見うけられるのはオークランド（ニュージーランド）である。

のんびりした生活リズムの中に暮らし、たっぷりの睡眠をとり、自己像が明るく、一日の楽しさ感も強く、幸福感も強い。

2) ロスでは、テレビ視聴時間が長く、朝食の給食利用や、朝食抜きの子など、家庭崩壊の影が感じられる。そのためか、「おとなになるより、いつまでも子どものままでいたい」子どもが多くなっている。

3) 日本の子どもで気になるのは、環境（学校配置や母親のケア）は配慮されているが、自己像が暗く、自信がない。一日の楽しさ感、幸福感も十分でない。

4) バンコクの子のデータには、何か物質的な不十分さの影を感じる。学校までの距離が遠く、朝食を屋台等でとる率も高い。また、総体としての一日の楽しさ感が弱い。しかし、家庭的なまとまりがあり、学校での授業時間の楽しさ感他地域より強い。そして、宗教的背景もあるのか、「しあわせか」と問われれば「しあわせ」と答える子どもが多く、自己評価も高い。（表20）

15. 朝、学校へ行きたくない

「朝、学校へ行きたくない」と「いつも・わりと」そう思う割合が多いのはロス（37%）とオークランド（35%）で、東京の子がそう思う割合は19%、バンコクは7%にとどまっている。（図3）

16. 教科の勉強は好きか

算数に例をとると、算数が「とても好き」なのは、ロスが48%、オークランド45%で、「朝、学校へ行きたくない」と言っているにしては、子どもたちは勉強が好きと答えている。それに対し、東京の子が、算数が好きと思っているのは25%にすぎない。（表22）

17. 帰宅後の勉強時間

第1回目の調査も含めて、7つの都市の中で、勉強時間のもっとも長いのが、ソウルの2時間54分、次いでロスの2時間25分。それに対し、東京の子どもの勉強時間は1時間17分にとどまっている。もっとも、東京の子どもの33%は塾通いをしているので、実際の勉強時間は、もう少し長いものになる。（表24）

18. 勉強機の所持率

自分専用の勉強機を持っている割合のもっとも高いのが、東京の94%、タイペイ85%、ソウル72%となる。そして、シアトル58%、オークランド49%、バンコク41%など、諸外国では、経済的にゆとりがあっても、子どものうちは勉強機を与えない方針の親もいるように思われる。(図5)

19. 成績の自己評価

学業成績についての自己評価で、「とても・かなり」よいが、シアトルでは75%、ロスでは69%に達する。それに対し、東京の子は18%、タイペイ22%、ソウル33%である。

東京、タイペイ、ソウル、バンコク、そしてオークランド、さらにロスとシアトルの順で、子どもの成績についての自己評価が高まっている。そして、各地で調査を重ねた印象からすると、自己評価の低いエリアほど、教育過熱状況が進んでいるような印象を受ける。換言するなら、過熱状況が進むと、成績にこだわりを示し、自己評価が低下する。それに反し、教育をめぐる状況にゆとりがあると、成績の自己評価が高まる。(図6)

20. 希望する最終学歴

ソウルやタイペイ、バンコクなどNIE Sの地域では、子どもたちの半数が外国の大学へ進みたいと思っている。それに対し、ロスやシアトルの子どもは、自分の国の大学へ進みたいと考えている。(表29)

そして、日本の子どもの大学進学志望率は67%にとどまっている。学業成績が下位になるにつれて、大学進学はむずかしいと、進学を断念する割合が増加するためである。

21. 将来の見通し

アメリカの子どもたちは大きくなったら仕事で成功し、しあわせな家庭を作れるだろうと思っている。しかし、東京の子どもは未来は暗いと感じている。(図9)

アメリカの子どもたちは成績が不振でも将来に明るい見通しを抱いている。しかし、東京の子どもは成績の良し悪しと将来の見通しを関係づけて考えており、成績が下位になるにつれて、子どもたちは社会的な達成を断念している。(表34)

22. 女子の生き方

ロスやオークランドの子どもは結婚しても仕事を続けようとしている。しかし、東京の子どもの60%は、結婚したら仕事をやめるとしており、専業主婦志向が強い。(表36)

23. 男子の結婚観

ロスやオークランドの男子のほぼ6割は結婚しても仕事を続ける人と結婚したいという。それに対し、東京の男子でそう思っているのは4割にすぎない。(図11)

24. 自己評価と性差

シアトルやロスの子どもたちの自己評価に性差は少ない。しかし、東京の子どもたちは自己評価が低いのに加え、とくに女子の自己評価が低い。(図12)

25. 自己評価と地域

ロスやシアトルの子どもたちは高い自己評価をしており、明るい未来像を抱いている。それに対し、NIE Sの子どもたちは意欲に満ち、やる気を出して、未来にのぞもうとしている。東京の子どもたちは、自己評価が低く、閉ざされた未来を予感している。東京の子どもたちに挫折の影を感じる。

26. 全体として

1回目、2回目の調査を通して、NIESの子どもたちは意欲に満ちて毎日を過ごしているのが印象的である。子どもたちは懸命に勉強し、明るい将来を築こうとしている。

それに対し、アメリカでは家庭の崩壊が進むなど、子どもをとりまく環境は決してよいとはいえないが、子どもたちは自分に自信を持ち、子どもらしさを残しながら、元気に成長しようとしている。

そうした中で、東京の子は環境的に恵まれているのに、自分に対して自信を失い、意欲を喪失している。豊かな社会が到来し、親たちも少ない人数の子どもをていねいに育てようとしている。しかし皮肉なことに、子どもたちが子どもらしさをなくし、無気力傾向が感じられる。

子どもたちの意欲を伸ばし、子どもたちに未来に希望を抱かせるのにどうしたらよいのか。子どもの成長のスタイルをトータルに考えてみる必要性を感じる。考えてみると近代の日本では、子どもを型にはめるのが教育のように思われてきた。そうした子ども観を改めて、子どもの自主性を尊重する教育が必要となってきているのではなかろうか。



はじめに

このレポートは1987年から88年にかけて行われた「産業化社会の子どもたち」に次ぐ2回目の国際比較調査の結果をまとめたものである。前回は東京、仙台、岡山、ソウル、タイペイ、シアトル、ヒューストンの小学5年生の子ども6,147人を対象にして行われ、結果は1988年12月に東京のプレスセンターホールで国際シンポジウムが行われ、韓国、台湾、アメリカから研究者が招かれ、現代の子どもたちの成長とその問題点について活発な討議が行われた。

今回はさらに対象を、表1に示したようにニュージーランド（オークランド、ウェリントン）、タイ（バンコク、ロブリー）にひろ

げ、またアメリカについてはロサンゼルス地区（トーランス、ガーディナ）、日本では東京、札幌、福岡を対象に行われた。調査時期は表2に示したように1989年から90年にかけてで、前回同様小学5年生を対象とし、4か国9都市の3,568人の調査結果である。小学5年生を対象としたのは前回のレポートでも指摘したように、アメリカで近年6・3制が5・4制に移行する動きが出てきていること、すなわち6年生（12歳児）が小学校の最終学年でなく、中学校（middle school）の1年生に当たる地域が増加しつつある事情をふまえてである。

表1 サンプル構成（小学5年生）

地 域	地 域	トータル計	男子	女子
東 京	東京・札幌・福岡	1,282	645	637
ロ ス	トーランス・ガーディナ	376	191	185
オークランド	オークランド・ウェリントン	1,046	519	527
バンコク	バンコク・ロブリー	864	425	439
計	9都市	3,568	1,780	1,788

(人)

表2 調査の実施スケジュール

地 域	学 校 数	実 施 時 期
東 京	東京・札幌・福岡など9校	1989年10月～12月
ロ ス	トーランス・ガーディナなど6校	1990年2月～4月
オークランド	オークランド・ウェリントンなど12校	1989年12月～3月
バンコク	バンコク・ロブリーなど11校	1990年3月～4月

1. 調査対象都市のプロフィール



(Photo: 和田元弘、世界文化フォト)

今回調査対象とした4か国9都市について、ざっとそのプロフィールを紹介しておきたい。

〈オークランド、ウェリントン〉

ニュージーランドの表玄関といわれるオークランドは、国の総人口約330万人のうち、25%が住む最大の都市である。ニュージーランドと聞けば羊の国という連想がされるが、事実総人口約330万人に対して、羊は7,000万頭も飼育されているとか。そしてこの国は、過度の産業化や工業化による経済発展を選択せず、原子力の導入をも拒否した国、いわば人間的な暮らしを選択した国としても知られている。広大な自然の中で、人びとは完全な週休2日制の下で、土曜はスポーツの日、日曜は家や庭の手入れをして過ごす。なにしろ土曜の正午には、小売店までが完全閉店してしまうので、旅行者は食事をする店を探すのに閉口する。一部開いているのは観光土産の店と小さなスナックだけである。

この国の国鳥はキウイという長い口ばしをもった夜行性の鳥で、キウイ・フルーツの外側とよく似ている。この国の男性は完全な9時5時制で働くので、終業後は家にまっすぐに帰って家事や育児をする。キウイ・ハズバンドというニックネームは家庭的でこまめな男性を指すそうだが、とにかく性差が少ない国でもある。観光よりも「住んでみたい町」というのがツーリストのキャッチコピーだが、比較的庭も家も小さいがよく手入れされた美しい家を人びとは大切にしている。大橋巨泉氏の経営する土産物店へ行って、働いている日本人の青年に「いい町にお住まいですね」と言ったら、「退屈ですよ。日本ではお金さえあればどんな物も手に入るし、どんなレジャーも楽しめる。しかしここではそうはいきませんから」と不平顔だった。完全な週休2日制となると、人びとはヒマをもてあます。そ

の割に経済的には貧しい。お金をかけずに家族ぐるみのパーティーやスポーツをして過ごすから、独身だったり、またパーティーのメンバーとして人気がなかったりすると、身をもてあますだろう。ただし、スポーツ施設がたくさんあって費用もタダに近い。イギリス文化圏だから野球がないだけで、ゴルフからホッケー、サッカーやラグビーはむろんのこと、ハンググライダーまで楽しめる。そういえば世界に冠たるオールブラックスは、この国のチームである。人種的には白人が93%、残りがマオリ族であるが、その融合が非常にうまくいっている国である。

なお時差は3時間(9時が現地の正午)。気候は日本と正反対で、9月から11月が春である。成田からの飛行時間は約10時間。

またウェリントンはオークランドから660キロ。飛行機で1時間で着くウェリントンは、オークランドをニューヨークに例えれば、ワシントンDCに似た政治都市である。国会議事堂、国立博物館、図書館、古い教会などのある落ちついた都市である。

調査対象は、表1に示したように、両都市の12校の5年生1,046人である。(ただしニュージーランドの小学校入学は、9月または4月一斉に、というパターンではなく、ほぼ6歳の誕生日が来たら、バラバラに入学する。むろん6歳に達していなくても、入学させてよいと親が判断すれば5歳何か月かで適当に入学させられる。またゆっくりめがよいと思えば、7歳の入学でもよい。したがって、ニュージーランドの5年生は多少の年齢幅がある)この2つの都市は仮にオークランド地区と呼称してゆく。

〈バンコク、ロブリー〉

タイは日本の国土の1.4倍の広さに4,700万人ほどの人が住む、小乗仏教の国である。バンコクまでは成田を発って7時間ほどで到着する。人びとの信仰心はあつく、現在でも青年の60%は成人する前に仏門に入る。といっても戒律の厳しさから、3日か1週間、とい

う形だけの場合もあり、3か月から1年という熱心な青年もいる。「なぜ入門しますか」と問うと、「親が喜ぶので」という答えが返ってくる。家族的親和性の高い国でもある。東京や新宿と比べても遜色のないような中心街を、早朝、オレンジ色の僧衣をまとった僧侶がハダシで托鉢に歩く。その集まった食糧を、彼らは一日の食事にあてるのである。

王制がしかれていることは誰でも知っているが、いたる所に色ガラスの破片をはめ込んだきらびやかな寺院がそびえ、人びとは貧しい中で進んで喜捨をする。来世の幸福がそれで約束されるなら、何の不安もないのだろう。

小学校の夏休みは3月15日から5月15日まで。それから新学期が始まる。学校は昔から5日制だが、土曜は英語や算数の塾に通うとか。といてメコン川の河岸には有名な水上生活者の家があり、処処にスラムがあり、スラム人口は50万人から100万人にも達するというから、日本のように一律に子どもたちのライフスタイルを論ずるわけにはいかない。

バンコク市についていえば、私立小学校と国立小学校が約半分ずつで、女性のほとんどは共働きである。

調査対象となったのは、バンコク市とバンコクから100キロ離れた軍人と役人の町ロブリーの小学校である。ロブリーでは休みのはずの土曜日に先生が遅れた子のために補習のクラスを開いていた。70%の子が来ていて、夕方5時までやっているという。

経済的には、海外援助によって工業化しつつあり、NIESの国々を3、4年遅れて追いかけている国ともいわれている。

バンコク地区、またはバンコクとして扱ったサンプルはこの両都市の11校864人であった。

〈ロサンゼルス〉

「グレーター・ロサンゼルス」と形容されるほどロスとはとにかく広大で、関東平野がすっぽりおさまるといわれる。この都市については説明を要しないだろう。しかし国際比較

調査の対象としてはどこを選べばいいのか迷うところである。何しろダウンタウンに始まって、ハリウッドからビバリーヒルズ、サンタモニカなど、あらゆる都市の顔を備えた町だからである。

調査対象としたトーランスとガーディナは、ロス郊外の海辺の都市で、サンタモニカに次ぐ準高級住宅地。ロス・カウンティーの中で中流の教養ある白人の子どもたちを対象としたイメージだろうか。ご存知のようにロスの中心地には現在ホームレスの人びとが集まり、また黒人、メキシコ系やアジア系の人びとが居住しており、中産階級の人びとは周辺へと移住し、いわゆる住み分けが行われつつ

ある。したがってロスの中心地を対象とする場合には英語だけでなく、メキシコ語やスペイン語、韓国語など多様な言語の調査票が用意されなければならない。そこで今回の調査はロス地区として、この2つの都市を対象としたわけである。サンプル数は両市の6校、376人であった。

《東京》

日本のサンプルは東京、札幌、福岡を対象とした。サンプル総数は1,282人。このデータを東京地区、または東京と呼称してゆくこととする。

2. 家族と学校



(Photo: 坂本鉄平)

👨👩👧👦 家族をめぐって 🧑🧒

まずはじめに4つの地域の子どもたちの家庭環境に関する数字をひろってみよう。

表3は子どもの家族を示している。まず子どもの数はオークランド地区がもっとも多く3.2人で、子どもの数が3人以上の家庭は61%にも達する(ただしこの数字は子どもがいる家庭についての調査なので出生率よりは若干多い数字になっている)。それにしても3人、4人の子どもをもつ家がそこそこ見られるわけで、家庭のあたたかさ、にぎやかさが伝わってくるかのようだ。事実オークランドでは、欧米文化圏の国にしてはレストランでの

子ども連れの姿を目にすることができる。むしろれっきとしたレストランには子ども同伴が許されないが、ファミリー・レストラン風の場所には3人、4人もの子どもをつれた家族が2組、3組と集まって、親は親どうし、子どもたちは子どもたちどうして食事を楽しみ談笑している姿を見ることができる。

東京地区は子どもの数も2.4人と最小で、ついこの間1.57人という出生率を記録した国らしい数字である。なお家族サイズはバンコク地区が5.3人と最大だが、これは祖父母との同居率の高さ(27%)によるものであろう。

表3 子どもの数と家族

	東京	ロス	オークランド	バンコク
子ども数	2.4人	2.6人	3.2人	2.9人
子どもが3人以上	36.5%	40.2%	61.0%	53.6%
家族サイズ	4.5人	4.7人	4.6人	5.3人
祖父母と同居	20.4%	17.4%	9.4%	26.5%

学校配置

次に表4は通学所要時間とその方法である。毎日の子どもの行動半径の一端を明らかにするためのデータで、まず徒歩で学校に通う子ども（徒歩率）を見てみると、東京地区が96%と群を抜いて高く、よく整備された学校配置が見いだされる。しかも平均所要時間も5分と短い。これに次ぐのはバンコク地区で、徒歩率は75%と高いが、平均所要時間が34分と、昔の日本の子どもさながらに、30分以上もひたすら歩いて登校する子どもたち

の姿を想像することができる。またロスやオークランドでは多様な通学方法が特徴的だ。乗用車、自転車、バス、電車と、日本では禁止されている通学方法が当然のように用いられており、学校の配置が追いつかない広い土地に生活する人びとの暮らしが見いだされるが、それ以上に「学校の責任は子どもが校門へ入ったときから」であって、通学方法までは規制しない社会的慣習の表れとも見ることができる。

表4 通学所要時間と方法

地 域	時 間	徒 歩 率	他 の 方 法
東 京	5 分	96.2%	乗用車
ロ ス	10分	46.9%	乗用車・自転車
オークランド	11分	56.0%	乗用車・バス・自転車・電車
バンコク	34分	74.8%	乗用車

3. 生活リズム



(Photo: 世界文化フォト)

🕒🕒🕒 起床から就寝まで 🕒🕒

表5は起床から就寝までの生活リズムを見たものである。起床時刻から朝食までの時間が十分とあれば、朝食もおいしいだろうが、どの地区も30分以内と短く、子どもたちの朝はどこでも忙しいものようである。とくにロス9分、オークランド18分という数値が目をひく。

次に起床から登校まではどの地域も約1時間。ここではオークランド地区が75分（1時間15分）でゆっくりした朝の時間の流れが特徴的だ。

次に夕食から就寝までの時間はバンコク地区がもっとも短く2時間18分。東京地区は3時間1分で、ロスと共に長い。夕食後再び勉強するのか、それともテレビの前に座るのだ

ろうか、その点は後で見てゆくことにしよう。そして就寝時刻から割り出した睡眠時間を見ても、オークランドは実に10時間20分とたっぷりとしている。平均でこの数値ということは、11時間かそれ以上も寝ている子がけっこういる勘定になる。われわれもその昔「目がつぶれますよ」と言われるくらい寝たこともあったのを思い出す。そして日本の子はたった9時間。他の3地域より際立って短い。第1回調査のソウルの子8時間44分、タイペイの子の8時間37分を引用するまでもなく、子どもが十分に寝られない生活上の条件を示す数値であろう。この点も後の章でふれることにしよう。

表5 生活時間

	東京	ロス	オークランド	バンコク
起床時刻	6:56	6:47	6:51	5:58
起床から朝食まで	24分	9分	18分	29分
起床から登校まで	59分	57分	75分	60分
夕食から就寝まで	3時間1分	2時間50分	2時間31分	2時間18分
就寝時刻	21:56	21:09	20:31	20:30
睡眠時間*	9時間	9時間38分	10時間20分	9時間28分

*ソウル 8時間44分
 タイペイ 8時間37分

朝食と夕食

さて一日の生活リズムのスタートを決めるともいえる朝食。表6によれば欠食率は日本が最小で2%。次いでバンコクの4%、オークランド8%、ロスが11%となっている。朝食を食べないで登校する子が、母親の手抜きや夜遅くまでの就労、また離婚や遺棄などを意味するとして問題にされるが、この点からいえば日本の母親と家庭は十分な健康性を保っているともいえそうだ。また自宅での朝食も97%と高率で、ロスやオークランドの朝の給食やバンコクの屋台での朝食の数値の8%、3%、12%という数値を見ると、ここからも日本の家庭の安定感が伝わってくる。これを仮に「家庭外朝食」と名づけてみると、この数値の大きさは家庭崩壊の進行状況を示すともいえそうだ。ちなみに、第1回調査のシアトルは13%、宇宙基地の町ヒューストンでは22%の高率であった。ロス郊外の準高級住宅地と安定したシアトルの数値が近いのも、そ

の点を説明できそうである。

また自宅での朝食でも、子ども1人の食事いわゆる「孤食率」を見てみると、東京は19%と最低で、多少文化の違いをも反映するにせよ、他の3地域の30%台に比べて特徴的である。しかし、他と比較して低ければいいと単純に喜んではいけないだろう。日本の文化的文脈の中では19%の子が1人で朝食をとっているとは、やはり気になるところである。

次に表7は夕食の食卓を見たものだ。孤食率は朝に比べて全体に低下しているが、なかでも日本の孤食率は4%ともっとも低い。しかし「家族そろっての食事」も42%と少ないのが気になる。その理由は父親が多忙のためらしく、隣の町の「父親のみ不在」の割合は39%と群を抜いて高くなっている。日本の父親がいかに家庭生活から阻害されているかが表れた数字であろう。

表6 朝食の様子

(%)

	欠食率*	自宅で食べた子	学校給食他	孤食率
ロース	10.8	80.9	8.3	30.0
オークランド	8.0	89.5	2.5	38.6
バンコク	3.5	84.2	12.3	36.8
東京	2.1	97.1	0.8	18.6

*シアトル 12.6%
 ヒューストン 21.7%
 ソウル 5.1%
 タイペイ 1.7%

表7 夕食の様子

(%)

	家族全員で*	父親のみ不在	孤食率
ロース	74.4	11.1	6.7
バンコク	67.4	17.8	7.1
オークランド	65.9	12.6	8.2
東京	42.3	38.5	3.5

*シアトル 63.7%

空腹感をめぐって

次に表8は、朝食のときと学校から帰ってきたときに空腹かどうかを見た結果である。子どもが朝食のテーブルでおなかを空かせているのは、前日によく外で遊び、家の手伝いなどで体を動かし、朝も早起きして——というように子どもらしい活力にあふれた生活と、よい生活リズムがあることをも示しており、決して生理的な状態ばかりではないことが、先行研究の結果から示されている。

こうした観点も入れながら表を見てみると、

もっとも盛んな食欲を示すのはオークランドの子で、「とても空腹」な子は朝食で27%、夕食で48%にも達している。もっとも数値の低いのはなぜかバンコクで、東京は3位という結果である。第1回目の調査の結果（朝食）を引用すると、ソウル7%、タイペイ13%で、なぜかNIESのエリアの子どもたちに空腹感が少ない。子どもたちの生活に、どこか無理や歪みがあるのだろうか。ちなみにシアトルでは23%であった。

表8 空腹感

(%)

	朝食時	帰宅時
オークランド	27.3	48.0
ロス	21.9	40.2
東京	11.7	20.9
バンコク	5.0	21.1
ソウル	6.7	11.7
タイペイ	12.5	32.9
シアトル	22.9	40.0

「とてもおなかがすいている」割合

誰と寝ているか

次に表9は誰と寝ているかである。第1回調査の結果とも比較すると、親と同室でという割合は、バンコク34%、ソウル32%、日本20%の順に高く、次いでタイベイ11%。ロス、

オークランド、シアトルは5%を切っており、ここに住宅事情ばかりでなく、親子関係の一端をも見る事ができる。

表9 誰と寝ているか

(%)

	一人で	兄弟と	親と	その他
オークランド	60.7	31.8	2.2	5.3
ロス	48.0	45.2	3.8	3.0
東京	31.8	43.1	20.0	5.1
バンコク	24.3	39.0	33.6	3.1
ソウル	22.9	41.7	31.9	3.5
タイベイ	36.2	47.7	11.3	4.8
シアトル	68.6	27.5	1.2	2.7

4. 放課後の過ごし方



(Photo: 世界文化フォト)

📺📺📺 テレビとのつきあい 📺📺

放課後に子どもたちは何をしているか。まず表10はテレビ所有台数であり、表11はテレビ視聴時間である。表10によれば、どの地域も今や複数テレビの時代に入っていることがわかる。付表によれば、テレビを全く持たない家は日本ではゼロ、バンコクですら3%である。事実、バンコクの人の話では「今は水上生活者の家や、極貧のスラムでさえテレビのない家はありません。他に何がなくてもテレビだけはありますよ」とのことである。そうした点から判断すると、テレビ視聴時間が長い——つまり余暇時間にテレビ依存率が高いのは、それだけ生活全体に時間的なゆとりがなく、文化的な幅が狭いことや、環境条件や生活条件が悪いことを示しているのかもしれない。

れない。

とすれば表11に示したような、ロスと東京の視聴時間が他の2地域より長い結果は、考えさせられるデータである。またロスは4時間以上の長時間視聴見も24%と多い代わり、30分以下の子どもも11%、1時間以下（30分以下を含む）の子どもも23%と分散が大きい。東京は4時間以上が29%もいて、30分以下が1%、1時間以下は5%と、つまり一様に長目の視聴をしている点に違いがある。良くも悪くもマイペースなロスと、等質的なライフスタイルの日本の差が表れている結果かもしれない。分散が最大なのはオークランドで、4時間以上が22%、30分以下も22%という結果である。

表10 テレビ所有台数

		平均	2台以上	テレビのない家	
ロ	ス	2.5台	79.5%	東	京 0.0%
東	京	2.3台	76.7%	ロ	ス 0.8%
オー	克蘭ド	1.8台	56.0%	オー	克蘭ド 2.4%
バン	コク	1.8台	48.6%	バン	コク 3.1%

表11 テレビ視聴時間

		平均(時間)	1時間以下	4時間以上	視聴時間30分以下	
ロ	ス	3時間5分	23.0%	23.8%	東	京 0.5%
東	京	2時間59分	4.9%	28.9%	ロ	ス 10.7%
オー	克蘭ド	2時間42分	30.1%	22.0%	オー	克蘭ド 21.8%
バン	コク	2時間25分	24.7%	12.7%	バン	コク 9.4%

家事の手伝い

次に、表12は子どもたちがどのくらい家事を分担しているかである。表は「毎日する」割合を示しており、国際比較で最大値を○、最小値に―を付してある。表が示すように、バンコクの子どもはもっとも（項目数では）

よく手伝いをしており、目立って少ないのは東京の子どもである。また表13は性差をみたものだが、オークランドの子はほとんど性差が見られず、東京、ロス、バンコクでは女子のほうがよく手伝っている。

表12 家の手伝い

(%)

	東 京	ロ ス	オークランド	バンコク
洗濯	1.3	5.4	4.4	9.7
庭の掃除	2.8	2.7	3.2	11.3
夕食の買い物	2.9	7.5	7.3	8.5
皿洗い	6.1	17.3	31.0	28.1
部屋の掃除	6.4	26.2	19.3	22.0
夕食の手伝い	8.3	21.0	13.7	7.6
兄弟の世話	12.7	21.8	15.1	30.9
部屋のかたづけ	18.3	12.0	7.5	19.6

「毎日する」割合

表13 家の手伝い×性差

(%)

	ニュージーランド		ロシア		オークランド		バンコク	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
洗濯	0.9	1.8	3.2	7.7	4.5	4.2	5.3	13.4
庭の掃除	1.8	3.9	3.2	2.2	5.5	1.2	12.2	10.6
夕食の買い物	2.4	3.5	6.9	8.2	7.0	7.3	7.3	9.4
皿洗い	2.5	10.3	11.7	23.1	30.9	30.7	21.7	33.1
部屋の掃除	4.6	8.5	22.9	29.7	16.8	21.6	16.8	26.3
夕食の手伝い	4.8	12.4	13.4	26.8	12.8	14.2	5.3	9.5
兄弟の世話	10.9	14.5	19.0	24.6	13.2	16.4	25.5	35.0
部屋のかたづけ	13.3	24.0	17.9	6.0	11.4	3.8	18.6	20.2

「毎日する」割合

5. しあわせ感をめぐって



(Photo: 藤原 正)

🎮🎮🎮 一日の楽しさ 🎮🎮

子ども時代は一日ごとにおとなの中から遠くなるものの、いつまでも希望と光にみちた時代として回想の中に輝き続ける。しかし今まさに、その子ども時代の中にいる子どもたち自身は、自分の生活をどのようにしあわせなものにとらえているのだろうか。

まず表14は一日で15の時間帯を拾い出して、それぞれの時間を「とても楽しい」から「ぜんぜん楽しくない」までの5段階で評価させた結果から、「とても楽しい」の数値を抜き出したものである。まず最も楽しさ感の高い項目を見てみると、4地域で共通に40%以上を示す項目は「放課後友達と遊ぶとき」「昼休み」「テレビを見ているとき」で、それに次ぐ項目が「体育の時間」となっている。

また楽しさ感が共通に低いのは、「宿題をし

ているとき」「朝食のとき」「朝目ざめたとき」であり、なぜか子どもにとって、朝はよい時間帯とはいえないようである。

次に表15は、その数字を4地域の間で比較し、これに順位をつけたもの。そして順位の平均を「順位平均」とし、またそれぞれの楽しさの平均を「楽しさ感」として最下欄にまとめた。表は楽しさ感が順位でも%でも最大のオークランド、次いでロス、東京、バンコクと大小順に並べてある。のんびり型の生活リズムをもつオークランドの子どもたちは、15項目中7項目がどの地区の子より楽しさ感の数字が高い。「朝目ざめたとき、朝食のとき、授業の始まる前、給食（昼食）の時間、夕食の時間、テレビ視聴時、宿題をしているとき」のいずれもが、4地域の中でもっとも

表14 一日の楽しさ

(%)

	東京	ロース	オークランド	バンコク
70%				体育の時間 (76.7)
60%	放課後友だちと遊ぶとき (68.7) 昼休み (64.7)	昼休み (65.2)	昼休み (62.8)	昼休み (63.8)
50%	体育の時間 (52.9)	寝ているとき (51.9) 放課後友だちと遊ぶとき (51.2)	体育の時間 (53.7) 放課後友だちと遊ぶとき (53.2) テレビを見るとき (52.8) 寝ているとき (50.9)	
40%	テレビを見るとき (47.8)	テレビを見るとき (48.8)	給食のとき (42.5)	放課後友だちと遊ぶとき (46.2) マンガを読むとき (41.5) テレビを見るとき (40.9)
30%	給食のとき (38.2) マンガを読むとき (38.0) 寝ているとき (30.9)	体育の時間 (39.4) 夕食のとき (35.3) 給食のとき (33.9)	夕食のとき (35.5)	両親と話すとき (31.2)
20%	夕食のとき (28.6) ふとんに入るとき (28.2) 両親と話すとき (27.6)	ふとんに入るとき (28.4) 両親と話すとき (27.9) マンガを読むとき (26.0) 算数の時間 (24.9)	両親と話すとき (29.1) マンガを読むとき (27.9) ふとんに入るとき (26.4) 算数の時間 (24.1) 授業の始まる前 (21.7)	算数の時間 (27.2)
10%	算数の時間 (14.3) 授業の始まる前 (13.0) 朝食のとき (11.0)	授業の始まる前 (18.4) 朝食のとき (17.8) 朝目ざめたとき (15.3) 宿題のとき (11.5)	朝食のとき (19.1) 宿題のとき (16.2) 朝目ざめたとき (15.9)	給食のとき (16.2) 授業の始まる前 (15.9) 宿題のとき (11.4)
0%	朝目ざめたとき (7.7) 宿題のとき (4.7)			ふとんに入るとき (9.9) 寝ているとき (9.5) 夕食のとき (7.3) 朝食のとき (2.7) 朝目ざめたとき (2.1)

「とても楽しい」割合

表15 一日の楽しさ（各国間の比較）

	オークランド	ロス	東京	バンゴク
朝目ざめるとき	① (15.9) %	② (15.3) %	③ 7.7 %	④ 2.1 %
朝食のとき	① (19.1)	② (17.8)	③ 11.0	④ 2.7
授業の始まる前	① (21.7)	② (18.4)	④ 13.0	③ 15.9
給食のとき	① (42.5)	③ 33.9	② (38.2)	④ 16.2
夕食のとき	① (35.5)	② (35.3)	③ 28.6	④ 7.3
テレビを見るとき	① (52.8)	② (48.8)	③ 47.8	④ 40.9
宿題のとき	① (16.2)	② (11.5)	④ 4.7	③ 11.4
体育の時間	② (53.7)	④ 39.4	③ 52.9	① (76.7)
放課後友達と遊ぶとき	② (53.2)	③ 51.2	① (68.7)	④ 46.2
両親と話すとき	② (29.1)	③ 27.9	④ 27.6	① (31.2)
一日の楽しさを感じているとき	② (50.9)	① (51.9)	③ 30.9	④ 9.5
算数の時間	③ 24.1	② (24.9)	④ 14.3	① (27.2)
ふとんに入るとき	③ 26.4	① (28.4)	② (28.2)	④ 9.9
マンガを読むとき	③ 27.9	④ 26.0	② (38.0)	① (41.5)
（休日）休みの日の過ごし方	④ 62.8	① (65.2)	② (64.7)	③ 63.8
順位の位（平均）	1.9位	2.2位	2.9位	3.0位
楽しさを感じる割合（平均）	① 35.5 %	② 33.1 %	③ 31.8 %	④ 26.8 %

*ソウル 36.7%
 タイペイ 26.8%
 シアトル 26.1%

「とても楽しい」割合
 ○印の中の数値は順位を示す

楽しさ感が強い。またこの7項目を地域ごとに比較すると、楽しさ感の平均値はオークランド29%、ロス26%、東京22%に対してバンコクの子どもは14%と際立って低い。ちなみにバンコクの子どもの数字全体を見ると、「体育の時間」が77%と他を大きく抜いて高く、また「両親と話するとき」が31%、「算数の時間」27%、「マンガを読んでいるとき」42%が特徴的である。この国ではかつての日本のように、学校が子どもにとって十分価値的な場、つまり行くことが楽しい場なのであろう。また「両親と話するとき」が楽しいのは、1回目の調査のソウルがそうだった。アメリカ文化圏と違って、なお家族的親和が大切にされている様子が見いだされる。またバンコクのデータに限って言えば、「ふとんに入るとき」「寝ているとき」の数値が共に10%と他の3地域と大きく隔たって低いのも特徴的である。寝るのを楽しみにする子どもの生活は、どこか現実

の中にストレスがあり、子どもらしい生活が圧迫されているのかもしれないのである。またバンコクの数値で高いのは「マンガを読むとき」42%で、東京の38%と共に他を引き離している。この2つの地域は子どもの楽しみの選択肢が少ないのかもしれない。

なお東京の子どもの楽しさ感は、15項目中1位が1つ、「放課後友だちと遊ぶとき」で、69%という数字は他の3地域を大きく引き離して高い。それだけ子どもたちの放課後が各種の学習によって圧迫されていることの証拠だろう。そして2位は「給食のとき」「ふとんに入るとき」「マンガを読むとき」「昼休み」となっており、逆に4位、すなわち楽しさ感の低いのは「授業の始まる前」「宿題をしているとき」「両親と話するとき」「算数の時間」で、勉強が子どもを圧迫し、または両親が子どもを圧迫しているかのように思われる数値が見いだされる。

📊 しあわせですか 📊

では、子どもたちにもっと直接的に「あなたはしあわせですか」とたずねたらどうなるだろう。

表16は「とても・かなりしあわせ」の数値をまとめた結果である。4地域がすべて70%台をキープし、どこの子どもたちもおおむね自分をしあわせと考えている様子がわかる。なお男女別では、表17のように、どの地域でも女子のほうがしあわせ感が強いが、とくに東京とロスではその男女差が大きいのはなぜだろう。

こうした「おおむねしあわせ」な状態を、

表16の右に加えた一日の「楽しさ感」と比較してみると、オークランドはいずれの数値でも高く本当にしあわせな状態にいるのだろう。またバンコクの子どもは一日の楽しさ感が低いのに「しあわせですか」と問われれば「しあわせ」と答える子が多い。小乗仏教の国タイでは、人びとは低い収入の中から思いきりよく僧侶やお寺に多額の喜捨をする。そうすれば来世の幸福が約束されると人びとは考える。そうした宗教的背景の一端が反映しているのかもしれない。

表16 しあわせ感

(%)

	しあわせ感*	楽しさ感(再掲)
オークランド	79.8	① 35.5
バンコク	78.9	④ 26.8
ロシア	73.8	② 33.1
東京	70.8	③ 31.8

「とても・かなりしあわせ」の割合

*ソウル 76.6%

タイベイ80.3%

表17 しあわせ感×性差

(%)

		東京	ロシア	シアトル	オークランド	バンコク	ソウル	タイベイ
男子	とても	37.9	28.6	50.1	38.0	47.6	53.4	43.1
	かなり	26.7	38.4	23.6	38.0	29.4	11.8	17.4
	小計	64.6	67.0	73.7	76.0	77.0	65.2	60.5
女子	とても	53.4	39.2	51.1	43.3	57.9	56.7	46.2
	かなり	24.3	41.4	25.4	39.8	22.8	13.8	19.3
	小計	77.7	80.6	76.5	83.1	80.7	70.5	65.5

自己評価

自分の人生をしあわせと感ずるかどうかの背後には、自分自身をどう評価できるか、すなわちセルフ・エスティームの確立の有無があると思われる。図1、図2は、「あなたは人気のある子ですか」「正直な子ですか」とたずねた結果である。この図が示すように、バンコクの子がいちばん自己評価が高く、次いでオークランドとロス、そして際立って評価の低いのが日本の子どもである。

表10は「勉強のできる子」から「スポーツのうまい子」までの7項目（「正直な子」「人気のある子」を含む）について、「とてもあてはまる」割合を作表した結果である。国際比較をして最大値を示した数値に○、最小値

に___を付してある。また平均値を最下欄に示した。表が示すように、最小値はすべて東京の子に集まっており、しかもその数値が他と比べて僅差ではなく、半分かそれ以下の低い割合であることが特徴だ。こうした数値を控え目な自己評価をする文化と過大に評価する文化の差として説明できるのか、それとも学習競争の中で、日本の子どもたちが自分に自信を失っている証拠なのか、議論が必要であろう。この点は後の章で成績評価との関わりでさらに分析をすすめたい。なお第1回調査の結果から引用した数値を見ると、東京、ソウル、タイペイの子どもの評価が同じように低くなっている。

図1 自己評価（人気のある子ですか）

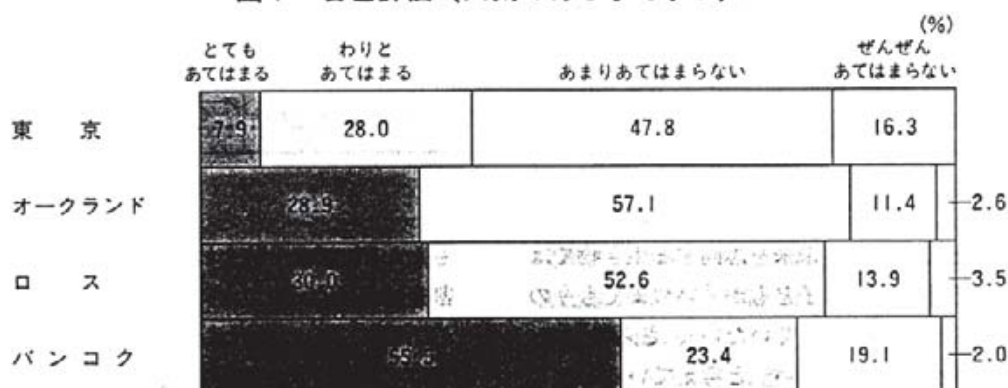


図2 自己評価（正直な子ですか）

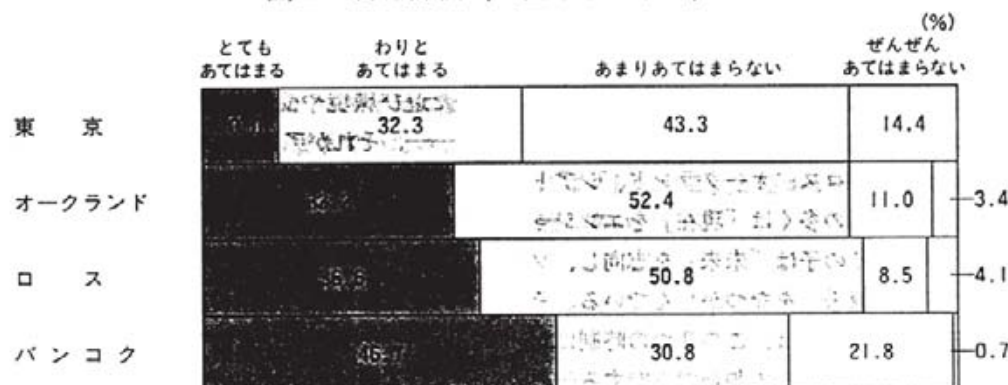


表18 子どもたちの自己評価

(%)

	東京	ロス	オークランド	バンコク	ソウル	タイペイ	シアトル
勉強のできる子	6.3	27.6	26.9	21.6	8.0	6.2	34.7
人気のある子	7.9	30.0	28.9	55.5	7.1	12.9	28.0
正直な子	10.0	36.6	33.2	46.7	18.0	13.4	29.3
親切な子	12.8	35.4	33.8	39.8	20.0	11.9	34.0
よく働く子	15.7	37.4	32.8	26.3	24.7	12.4	36.7
勇気のある子	17.5	34.0	35.4	26.1	23.9	14.8	39.6
スポーツのうまい子	18.1	39.9	36.9	25.8	25.1	20.7	37.5
平均値	12.6	34.4	32.6	34.5	18.1	13.2	34.3

「とてもあてはまる」割合

成長欲求

子どもは本来、未来を志向する生き物ではなからうか。もし子どもが「いつまでも今のまま、子どものままでいたい」、さらに「もっと小さい頃に戻りたい」と考えているとしたら、それは子どもたちの生活に何かの問題があって、子どもたちが活力を失っていたり、不幸だったりしていることの現れではなからうか。

こうした時間の中での志向性を見ようとしたのが、表19である。第1回調査のデータとも合わせると、ロス、オークランド、シアトルの子どもたちの多くは「現在」をエンジョイし、タイペイの子は「未来」を志向し、ソウルの子は「過去」をなつかしんでいる。そして日本の子どもには、この3つの時制に対して、それぞれかなりの割合で志向する子ど

もたちがいる。「早くおとなになりたい」子の割合はタイペイに次いで多いが、過去志向する子もソウル、タイペイに次いで3番目、バンコクのデータが事情でとれていないが、明らかに欧米文化圏とアジア文化圏では子どもの成長のスタイルとその環境が違うようである。離婚率の高さや家庭崩壊はおとなになることへの不安を抱かせ、そして今は、恵まれた遊び環境や受験体制のゆるやかさがある——、それがアメリカやニュージーランドの子どもの「現在」にしがみつかせるのかもしれない。

なお表20は、以上の結果から主な数値を拾い出してまとめたものである。

1) 4地域の中でもっとも幸福感が高く、客

表19 成長欲求

	東 京	ロ ス	オーク ランド	ソウル	タイペイ	シアトル
早くおとなになりたい	36.8	26.8	25.1	34.4	50.4	21.8
いつまでも子どものま までいたい	38.0	63.5	64.9	22.8	12.4	71.8
小さい子どもの頃に戻 りたい	25.2	9.7	10.0	42.8	37.2	6.4

表20 まとめ

	子ども の数	子ども 3人以上	家族 サイズ	テレビ の割合	テレビ 視聴時間 (1日)	平日の 睡眠時間 (1日)	睡眠 時間	朝食抜 きの子 の割合	家族そろ って夕食	空腹感 (朝)	空腹感 (夕)	一日の 楽しさ感	しあわ せ感	自己評価 (高い子)
東 京	2.4人	36.5%	4.5人	76.7%	9時間59分	59分	9時間	2.1%	42.3%	11.7%	20.9%	31.8%	70.8%	12.6%
ロ ス	2.6	40.2	4.7	79.5	9時間5分	57	9時間38分	10.8	74.4	21.9	40.2	33.1	73.8	34.4
オーク ランド	3.2	61.0	4.6	56.0	2時間42分	75	10時間20分	8.0	65.9	27.3	48.0	35.5	79.8	32.6
バンコク	2.9	53.6	5.3	48.6	2時間25分	60	9時間28分	3.5	67.4	5.0	21.1	26.8	78.9	34.5

観的にも子どもらしい生活があるように見う
けられるのはオークランド（ニュージーラン
ド）である。

のんびりした生活リズムの中に暮らし、た
っぷりの睡眠をとり、自己像が明るく、一日
の楽しさ感も強く、幸福感も強い。

2) ロスでは、テレビ視聴時間が長く、朝食
の給食利用や、朝食抜きの子など、家庭崩壊
の影が感じられる。そのためか、「おとなにな
るより、いつまでも子どものままでいたい」
子が多くなっている。

3) 日本の子どもで気になるのは、環境（学

校配置や母親のケア）は配慮されているが、
自己像が暗く、自信がない。一日の楽しさ感、
幸福感も弱い。

4) バンコクの子のデータには、何か物質的
な不十分さの影を感じる。学校までの距離が
遠く、朝食を屋台等でとる率も高い。また、
総体としての一日の楽しさ感が弱い。しかし、
家庭的なまとまりがあり、学校での授業時間
の楽しさ感他地域より強い。そして、宗教
的背景もあるのか、「しあわせか」と問われ
れば「しあわせ」と答える子が多く、自己評
価も高い。